



伝統の技と現代性を表現。『ami』シリーズの『isu』(左)はグッドデザイン賞受賞

「人々は今、心の豊かさを求めている。海外原産のラタンを使い、海外にない製品を作り出す。そこに喜びがある」

(デザイナーで籐に生命を吹き込む会田氏。若手職人の育成にも力を

その過程でデザイナーとの間で方針をめぐって相違が生じていた。

「斬新なデザインを求めてはいた

が、(私どもは)売らなければならぬ。これまでの販売先、顧客が果たして理解してくれるか」。

一方、米谷氏は今までになかった籐製品にこだわっていた。直線的なデザインであり、そのためフレームにステンレスを使った。籐は軽くて曲げに強い。自然と丸みを帯びた形になるのが特徴。それが直線に戸惑いがあった。

しかし、会田氏は思い直した。

「それまでになかったモノを市場に出すことによって、山形でこういう仕事をしている会社があることを知つてもらえる。自社のこれまでの製品にも目を向けてもらえる。やつてみよう」。

伝統に基づく熟練の技が生きた。独自性が評価され、ブランド力が生まれた。それまでになかった銀座、西麻布、自由が丘といった都会の洒落店から引き合いが来た。

山形市宮町の工場には長短さまざまな籐が積まれ、その道50年以上のベテラン職人、そして若手が、黙々と手職の技を見せる。

「独自性もさることながら、東北で籐を扱っている工場はここだけになってしまった。伝統を守り、生活に便利で、楽しく、潤いをもたらす商品を世の中に送り出して生きたい」。会田氏は若い人たちの作品発表の場にも、とオープンしたギャラリー

山形デザインコンペティション実行委員会(県、山形県商工会議所連合会などで構成)は魅力的で競争力の強い商品づくりとデザインマインド向上を目指す事業として、「山形エクセレントデザイン」を開拓、山形県内で企画・開発し、生産されている家庭用品、業務用品、公共用品の3分野の製品を対象に、優れたデザインの製品について、選定・顕彰を行っています。山形商工会議所は「キラリ山形発『元気なモノ作り』シリーズ第2弾として、管内でエクセルトデザインに選ばれた事業所を紹介します。今月号は斬新なデザインで籐製品を製造販売している(有)ツルヤ商店

山形エクセレントデザイン受賞製品から

漸新さと伝統マッチング 東北で唯一の籐メーカー

(有)ツルヤ商店

創業1907(明治40)年、会社設立1961(昭和36)年11月。籐(家具インテリア製品)製造販売。

2006年には『ami』シリーズで山形エクセレントデザイン大賞受賞。会田源司代表取締役。山形市宮町5-2-27、電話023(632)4408

て、籐製品はインテリアとして売り出されブームとなつた。ところが、これが災いした。海外から安価な製品が輸入され始めた。それらの製品は、大量生産をするために原木から皮をむくのに機械を使用していた。

耐久性が違う。壊れやすいことから、外見は同じように見えても、頑健さ、(手作りの自社製品も)使い捨ての物、というイメージでとらえられるようになつた。同じ時期、大口の受注先が倒産した。

「このままでは将来がない。4代目の自分で家業を途絶えさせるわけにはいかない」。

若いころ修行したメーカーが、デザインに力を入れていたことが、ずうっと心の中にあつた。帰郷した時から秘めていたオリジナル製品開発へ、と心が動いた。

「デザインで勝負だ」。

ちょうどそのころ、県工業技術センターが、地場産業支援制度の一環として、デザインを活用したモノ作り、製品開発に取り組んでいた。同センターのデザイン開発講座に通い始めた。そこで紹介されたデザイナーセンターの『ami』シリーズが誕生した。

米谷ひろし氏と組んだ。そうして、県エクセレントデザイン大賞、グッズデザイン賞を受賞する『ami』シリーズが誕生した。

名称は「編み」とフランス語の「友達」をかけた。

びても細いもの、堅いもの、と千差万別。茎についているトゲで他の植物にからみつき、長いものは200cm以上にもなる。従つて用途は広い。司氏が、家業を継いだのは28年ほど前になる。大学を卒業後、都内の籐メーカーで経験を積んだ。その会社は画家岡本太郎をはじめとして、著名なデザイナーに設計を託していた。それまで家業のほんとが下請けだったことを思うにつけ、刺激を受けた。「独自の商品を創り出したい」。

そう決意し帰郷した。

店は1907(明治40)年に曾祖父が創業した。近在の農家の人が採

取してくるアケビやブドウを使い、手提げかご、脱衣かごをつくった。昭和に入り籐を扱い始めた。丈夫で長持ちのする振りかごや乳母車を手掛け、飯豊町中津川、大石田町次年子に工場を持つまでになつた。ツル細工は山や畠で働く者にとって身につけていた。昔から手わざを編み方や形を指導した。

昭和40年代から50年代後半にかけては身近な冬仕事。昔から手わざをして理解してくれるか」。

「このままでは将来がない。4代目の自分で家業を途絶えさせるわけにはいかない」。

若いころ修行したメーカーが、デザインに力を入れていたことが、ずうっと心の中にあつた。帰郷した時から秘めていたオリジナル製品開発へ、と心が動いた。

「デザインで勝負だ」。

ちょうどそのころ、県工業技術センターが、地場産業支援制度の一環として、デザインを活用したモノ作り、製品開発に取り組んでいた。同

センターのデザイン開発講座に通い始めた。そこで紹介されたデザイナーセンターの『ami』シリーズが誕生した。

米谷ひろし氏と組んだ。そうして、県エクセレントデザイン大賞、グッズデザイン賞を受賞する『ami』シリーズが誕生した。

名称は「編み」とフランス語の「友

達」をかけた。

元気なモノ作り(2)

